天寶
註解改正今博物筌　二月部　二

二月部目録

△印あるハ俳僧の季を持りのべ

○養生の法○雨風の考○米の豊凶○妙薬その外人家重宝のこゝろ
外やゝ数多あるゆへ目録ハいとるさぞ

二月　建卯月支　調子　初丁
陰陽生　異名

△驚蟄節　十二候　古候　二丁
△春分中　七十二候　天氣候　二丁

二月日令　二月日の定日ごとに天文のさだまるこゝろ　天ふあつむ

△中和節　月酒三　献生子　四丁
上春服　四丁
△吉野餅配　四丁
△南都二月堂行　四丁
△釈奠　五丁
△初午稲荷祭　六丁
△水間祭　六丁
△東福寺戴法　七丁
△广耶参　七丁
初午諸祭　七丁
△西都春日祭　七丁
△江戸本妙寺詣　七丁
△大原の祭　八丁

△八幡初卯 八丁
踏歌節 八丁
賜尺 八丁
△萬神都會 八丁
△行基忌 十丁
△祈年祭 十丁
△若宮能 十丁
△祇園八講 十丁
泉涌寺釈迦開帳 十丁
△列見 十丁
△三月堂水取 十丁
△涅盤會 十丁
△佛の別 十丁
△嵯峨往炬 十丁
△長谷寺管弦會 十丁
△園韓神祭 八丁
迎富 八丁
蚕農市 十丁
△出代 十丁
△二日灸 十丁
△新能 十丁
△遺教經會 十丁
△貴船五穀祭 十丁
百花朝 十丁
花朝節 十丁
△二月の別 十丁
△さりし佛 十丁
△天王寺常楽會 十丁
△彦山祭 十丁

△餅花奠 十丁
△貝寄 十丁
観音誕辰 十丁
△浅間祭 十丁
△天王寺聖灵會 十丁
△天神御忌日 十丁
△菜種御供 十丁
△比良八講 十丁
普賢菩薩 十丁
△積塔 十丁

三月令 此部おい日の定まりくさる二月一ケ月のゐくゝ紙のうつりまるす

天和の節 十丁
△道明寺祭 十丁
△彼岸 十丁
彼岸天王寺祭 十丁
僧狩 十丁
天王寺踊念佛 十丁
△時宗踊念佛 十丁
△社日 社日雨 社鶯
△治聾酒 十丁
男女嫁娶 十丁
△紙鳶 十丁
導子 十丁
△初雷 十丁
鶯鳥の圖 十丁
侯霜 十丁
△水口祭 十丁
△田畑野山焼 十丁
△季御讀經 十丁

二月草木　此部ふい二月一ヶ月のさまの類とゝのへしるす

△苗代　同茱萸　廿三ウ　△潅浸　△穢苧　廿三ウ
湯種　△種ゆし　廿三ウ　△種蒔　△種子色　廿四ウ
△藍麻てまく　廿四ウ　△蔵　廿四ウ
△蒲公　廿五ウ　△杉菜　廿五ウ
△狗脊　廿五ウ　△枸杞　廿五ウ
△五加木　廿六ウ　△荒荻　廿六ウ
△韮　廿六ウ　△蒜　△野蒜　廿六ウ
△水葱摘　廿八ウ　△蒜芽花　廿八ウ
△菜の花　廿八ウ　△大根の花　廿八ウ
△鬘草　廿八ウ　△末黒薄　廿八ウ
△草芳　廿九ウ　△草竹若葉　廿九ウ
△萩の焼原　廿九ウ　△芦角　△芦錐　廿九ウ
△角組芦　芦の芽　廿九ウ　△艾摘　卅ウ
△若紫　卅ウ　△茨骨木花　卅ウ
△銀杏花　卅ウ　△紅梅　卅一ウ
告紅梅盛文　卅一ウ　△八重梅　卅三ウ
△座論梅　卅四ウ　△越中梅　卅四ウ
△黄梅　卅四ウ　△初梅　△初花　卅四ウ
△待花　卅四ウ　△糸桜　卅四ウ
△姥桜　卅五ウ　△児桜　卅五ウ
△一重桜　卅五ウ　△彼岸桜　卅五ウ
△熊谷桜　卅五ウ
種植　草木のたゝ[illegible]ふるゝ　桜木のくゝめ[illegible]　此ヲふゝく
△接穂　卅五ウ　茄子栽秧　卅八ウ
西瓜もく　卅六ウ　もゝ木。もゝ本　卅六ウ
ふやしまな　卅六ウ　蓮を植る　卅六ウ
修樹　卅七ウ　薬種根を取　卅七ウ
二月生類　此部ふい二月一ヶ月の生ものゝ類を集めるゝこと
△果鳥　△かをよる　卅七ウ　△雉子　卅七ウ

△燕　同巣　ラ　四八丁
△引鶴　△引鳥　ニ　四三丁
△孕雀　△雀の子　ニ　四四丁
△孕鹿　ニ　四五丁
△蜂　△蜂の巣　ニ　四六丁
△蝶　ニ　四七丁
△蟾蜍　ニ　四九丁
△蛙子　ニ　四九丁
△蒸鱈　ニ　五十丁
△蜷　ニ　五十丁
△もろこ　ニ　五十丁
△歸雁　ニ　四十丁
△烏巣　△吉巣　ニ　四十丁
△松菊鳥　ニ　四十丁
△鹿角落　ニ　四十丁
△虫　ニ　四十丁
△蛙　ニ　四九丁
△蛾子取　ニ　五十丁
△田螺　ニ　五十丁
△寄居虫　ニ　五十丁
△馬刀　ニ　五十丁

二月必用　此部かハ風雨の占。破軍の方。日どりのよしあし。他行の心得。作事のよしあし。料理もち立の法。食物のよしあし。其外品々ものゝむかの日の定つくる事ハ口の日会の部にあり。此部かい日のさだめ。ざう二月一ヶ月要用の事をあつめ。

二月之部

△此月あゝ能借の梨子とりのゝ

当月ハ青風臘月舒ハて仲陽の氣整野外へ出て青艸と踏天氣と事小受べ則狀陽の休そ草木の日咎とうる如く人も日の景と受て

異名　△仲春　△陽中　△如月　△令月　△夾鐘　△驚蟄　△春分

△小草生月　△梅月　△梅見月　△雪消月　△梅津月　△衣更着

異名註　○夾鐘ハ　夾ハ字甲也而の物あゝ　律のなゝ　なゝ沒で主くれ種を分　○如月ハ爾雅曰二月為如といつゝ警蟄。春分のゝけハ二丁目あゝ

(哥)　蔵玉　小草生月　顕昭

ふどりもるげゝきなにこいまゝ
月待なるむさゝのくさら

(哥) 梅花さき月　友則

うぐひすとのかよひぬ里の花なれば
花ぞなりける梅つさ月う

(哥) 蔵王　梅見月　有家

とふ人もなき花ぞの梅見る月
風のなさけを祝ふまつう毛

(哥) 莫信　雪消月

ゆ〻しく雪もえすの冨士の根の
ゆきさえ月のけもふれゝは

(俳) 花のさく木はいそとし弥二月　考

節。驚蟄。七十二候。草木萌動。昼夜長短昔の出入等左記

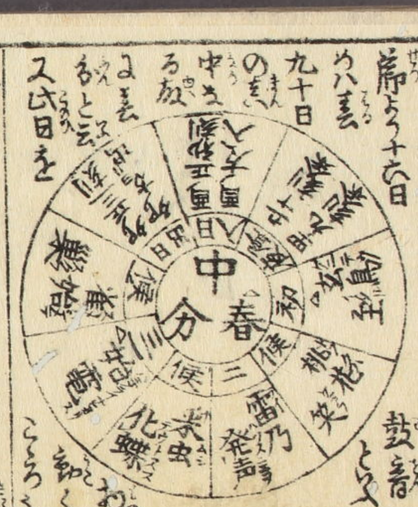
二月和と驚蟄とゝ
去年の秋ゝ
穴よ
入し
虫もけ
月の陽
発にかゝし

○梅始花は梅の花ひらきはじまる
○倉庚は鶯の別名なり俗にうぐひす
との異名ともれども倉庚は
鶯ウグヒスヌタラウグヒスとのひて来
大坂の辺に来鳴くゝ
去のでくるいうぐひす
とは別なる黒毛あり
小鳥なり二月なり
陰類なり鳥は陽類
さうんなるゝ感じて
も陽なの鳥と変
仲春に
仲春は春
妙術　節の日石歴と門極とが
の下に接付ける
節占候　雷あれば
きべ禾成傷
蟲あり
冬年なり辰巳
むしあり新の方早

○鶯は鳴くなり礼記出
月令に仲春に
雷あれば
中旬に雷あ
中旬雷あれば
赤虫にあれば
なれば

中 ○春分。七十二候。草木七十二候。日の光益長く生長盛なるなり

節より十六日目は玄九十日の中なる故



又戊日を

鼓音とゝろく

玄鳥とは燕の社日に来りて秋の社に帰るし布中に来りて人家に巣をむすびひなを養ふ穀果倍多

○雷声を発するとは陽相薄る感ずして雷となる云

雷とは陽にぐるのちゝめ

電と云玄は陽に入るれちゝめ

なまじ雷なく電こなき陰陽の相ゝ合はれば化ふ

雷とは日あの光

○玄とは日あの光

さるのひとくはしく知時く寒暖

ひとくはしく知時く寒暖

るまで二分まを晴と日入を考

きまで二分まを陰と考

ハせてまゝはは教の属とこいつり

春分祭 戊日考妣ハ死せる父母なり

考妣先祖をなるべし

生ハ祖父母ハ祖母ようこと上巳

いへ実冊生祖ハ祖父の根本

云るべからざる日とい一年之

入日ハ四時と云日ハ春

分夏至秋分冬至なり玄

秋二時なりてもはこの日ハ

一年に一日ふて和俗これと祥

時といへ毎月玄日ハ礼あら

ど春秋の彼岸ハ平生ハ

てはのごとく平生ハ

春分 天気占候 老人星出の

夕の下に沈む

天下大平閑日たるなり○春氣懷の方の生氣の中に出るこゝ順度なり青氣右くゝれば毒多し左に出るこゝ吹ぬけるもし氣生ざれば年中雪とくゝなく寒氣のゆるゝ○雲ゝ多くれば冬寒○雲ゝ早く○日晴ゝこゝ月ひうるて寒ゝ多らくゝけるこゝ大なる災しあり

占日風のふく方を

えて

豊　凶　寒　温　水旱

春分　占風

東　巽　南　坤　西　乾　北　艮

とゝる風の定まりなきゝ時は洪水なり

朝日　中和節　唐世初春を中和節と号す

中和酒　式日唐世百官宴を賜ふ二月曲水を

詩　花隨春令發　鴻度歳陽過

獻生子　唐土民間のもの青袋の百穀果の種を盛りて相共に人ふおくりてい

ちゝこれを献生子といへり

ふゝしといふうの年多くの花の法の花をうゝも此ゝられなり

上春服　唐土は王公貴戚よ黒ゝう衣服たゝるこ

天氣占候　朝日風雨なれば稲あゝしくなり

たゝい貴ゝ又病あゝ○流行して人ゝ多くゝ煩ひ死す

妙術 朝日いまだ日出でざるに遠志の心を去りてせんじ二杯のこしてこれを飲ばだせば疫をうるふことなく無病ゆゑこの長壽を得るなり實に是神仙の奇々妙法なり

吉野餅配 朝日花供懺法の両行人本堂へ出て御供奉幣廣庭ふる餅をまいらせ

南都 西京藥師寺造花會朝日七日まで金堂中にいろ〳〵の造り花を供し大法會行る俗に西京の花ともいふ

二月堂行 南都〻水取十二丁メニ朝日より十四日まで牛王加持の修法あり上七日尺像観音下七日八小観音勤る僧俗

俳 あるや彩の僧の傷の常汎る芭蕉

大坂 天王寺六時堂修上會有朝日より三日迄酉の刻

釋奠 上丁日 孔子をまつる二月八月両度有

誕を大先至聖文宣王と申奉るいにしへ朝廷より年毎に大學寮にて孔子をまつりまつる法式は孔子と顔子とをまつる人宰府にては孔子と閔子騫〻伏羲より延喜式に出たり文武天皇大宝元年二月より始まりと云ふ後花園院寛正年中にて終る孔子は上一人より下萬民に至るまで天下萬世の師なれば本朝にも学ひ〻らのむべ〻委く江次第に詳かなり○礼記王制に釈菜奠幣とあり釈奠と和訓はおきなうのまつりといふ

哥　年中行事

かゝんのかゝりけとられ　二位中将
ひゝとの時とゝくまうるなり

俳　伝授の補ハ是ハ釈奠　嵐雪
釈奠鳥の反哺ス待うう　野坡

詩　上丁詞　唐　陸放翁

燎火明中庭　老槐泣殘雨
○孔子ヲヨセル神前ニ庭火ヲタヽ[illegible]
本カ[illegible]ヲイモトクヤウニキコエル

白頭奉祀事　恐羅剛仰俯
○ワレラカゴトキ白頭ノモノハツヽシミテオカムモクルシキ

三終樂在懸　再拜肉升俎
○三番ノガクドウガカケテアリ　○ミクヨヲヘテオカムナリ

誰言千載後　恍若到鄒魯
○カウ年ヲヘテ聖人ノ生コヽニイタルヤウニオモフトハタレモオモハヌナリ

吾國雖編小　大社祚茅土
○コヽクニハイヤカノホサキクニナレドモ大キナル草ヲツミテマツルコトジヤ

如何儼章綬　日夜苦蕪楚
○ヲカシモク官人ノ印ヲオビテキビシクコルヒル

藏書如丘山　及物無一羽
○五ハ書ヲ山ノゴトクオサメテノミ井テ何ヒトツ人ノクメニホドコサヌイ[illegible]ヤナレバ

吾其可憐哉　去々老農圃
○アハレムベキモノジヤ　五ハコノツトメハヤミテ百姓ニテ身ヲスタサン

初午　稲荷祭

諸國これを祭る由

山城伏見のいなりといへるハ元明天皇和銅四年二月十一日山ヨリ現シタル古暦ヲ以テ考ヘるに此日午ノ日五穀の祢なれバ稲祢とも唱ふ山を三の峯と云本社第一ハ宇賀虛茅二素盞烏尊第三大市姫又田中社四大神併て五座ニ成永亨十年三の峯今の地ヨリ移せり氏日ハ洛中洛外ノ群衆す市人栗粟の種をうるしあるひ

い土人形をうるは深草の名
おまれびなうり古い形を打てか
さし　ぬりしく又紙ともゆ　知永

(冒)　夫木
いまり山杉のあを葉をはぶく
かへるいたるこりのもろ人　恵慶

後拾遺
いまり山このむぎうちたくき
我おきうこと我神もうこと　顕仲

(俳)　山ゆふ旨杉の手ふいこうる支考
うに成る初年五の小篠東仝

(狂)　初午へくまひ新そうばう
祇園化る茶屋どのうえ見梅

延喜六年月次屏風初年条の画貫之
ひくうのこ我こえなくにいたる山
ろうけ花のうかくしもらん

水間祭

和泉國水間觀音行基の他聖武天皇の勅願此日くに成るのハ年ハ厄難を除く○草薙をうつ境

(俳)　きつひやや水る道の鼠の先　洛生

京

真如堂境内にいるの条

京東福寺懺法

恵日山と号懺法六時ハ六根の罪と懺悔する修行ハ八日名画光殿司の画の観音の像世三幅を
かくるし又十万の札として火除の
守と方すの紙ハ十万の字をか
いて寺内同聚菴よういだす

(俳)　歌ゑの傳も懺悔よ東福寺　越人

摩耶参

摂州兎原郡畑原村山上ハあり仏
母摩耶山切利天上寺と云天
武天皇の御時法道仙人の創造
なり八日参詣の人ハ福を得る又
馬の無難を祈る土産もの昆
布を賣是を摩耶昆布と云
山の絶頂ハ絶景を摂播又四国の

山海一目にのぞこそ見るるなり

(俳) 撲股のとゞもはこ丁耶系 都文

(狂) 系ゐい山の下からのぼろくされ
ばよまやの紀考しつて 湖春

近江本妙寺詣

今い寺院跡なり旧跡ハ

三上山のほとろうあり今も初
年ゆい詣ず帝分れ年三羽上羽差

上申 南都春日祭

仁明天皇 嘉詳三年

九月始て中臣秀基奏聞とへ
て清和天皇貞觀十一年十一
月九日庚申の夜初て行はる其
式江次第に委し関白藤原家の

(哥) 堀川百二百首 顕仲

春てこそ人のいのらまてまを日山
松のさゝえもいやまさりけり

日

あめの下たえぬとそ思ふさらぬ紀
かすがの山れ神とまつるとそ

(詞) 小車。家へ。馬。初る。南巻。三百五。

上卯 大原野祭

山城乙訓郡 京より四里

許西し春日の社と同神なり
仁壽元年二月后宮御祈の為
式所へ勸請なしたるなりと
大原野行幸さどもあり

(哥) 年中行支 経賢僧都

きちゝ〳〵やゝ〳〵神まるをしゆ
こやゝ月さくよ元のちゝ由

伊勢物語

大原やをしはの山もろ人ことい
神代のゆもたりひいづゝる

(詞) 糸毛車。むらゝ。殿。住おすれ

(俳) 大原女本も女にゝ宗因

京 八幡初卯。神系あり伶人
山井。多豊安倍之どこれと勢。

上丑 園韓神祭

古大内裏の宮内省有後

林家にてこの事昔八二月十二日に初
条議一人をゝる所に熟て事と初ゝ

たゝえ治病醒井通にあり　本草和名云
(俳)人口ことぐさ　其球の字彙　都文

二日 不成 就日 △ 踏青節 三月 二月民俗酒をたづさへて郊に出て花賞をなす踏青とも云閏中二日ともつて成るとする

占候 二日雨あれば蠶桑大のはし　霜氷い早かり

迎富 もろこしの法国酒と携へ郊外に出て弦歌と楽を尋て暮にいたるこれを迎富とも云日おの神祭の事なり

賜尺 唐制是日近臣に羽の尺をたまふ

蠶農市 唐土蜀の國に二月二日八日と両日かいこかゝるものゝ道具を賣もう其あたひ多く貫にいたる

萬神都會 二日とゝの氏日夫婦のことを禁

出代 出替今日ゝうゝ来年二月二日迄と奉公人の期とす京大坂は三月五日九月十日を年と期とす

(俳)出代の頃や初氣のかゝひやそ　麦林

行基忌 ほのゝ豆腐ゝ　弘て有行基建立ゝゝ沈ゝ一月の魚ありて豚肉あり忠度のうたひゝ用も宿ゝ

ゝゝしひ〳〵ゝ延寿式曰僧正行基昆陽院の雑事は行基司別当と共に検校と知ると云ゝ延元二年将軍氏寺捨文有

二日灸 (俳)赤小豆煮る巫ゝ二日の灸部　如泉

(狂)二日やいとゝみたゝとゝいきのさゝもとさとも成て云わるゝて端

祈年祭 ◎中巳なく四門ゝ食なしめんと祈年祭ゝ背は神祇官ゝて祈る今八せて五

哥　年中行事
いのるてゝ此のとなゝ元君ゝ代を
そゝせあすうの弗やうくらん

京　六位殿寮ちに法盛の志を
行くへ寺い　鴨川東五條より

七日　薪能　南都興福寺南大門
四座の内二座休暇
うゝ見とほゝむ十三日まで取
に入りそつゝむ　見紙くもゝ

俳　地うたひの袋さうゝ義ゝ　沾徳
傘の紙のあり通し　其角

狂　春日のゝ藪の紙ハ名ゝ　あゝ
とゝびひのゆちいでゝうゝや　貞柳

春日若宮能　九日ゝ南都若
宮のまへて能を
勤む十日　同　能を勤
ゝ千三日迄門能を勤

八日　今日白髪
とぬくべし

占風　東南の風ハ水
西北の風ハ旱と

八講　八講とは法花八の巻の大
意と論じるゝ今ハ修ゝ

祇園

九日　遺教經會　釈迦滅度の
釈迦堂大報恩寺　八条十六通
ちまて行る十五日まて有
ゝと　誦讀會ゝも云

俳　多ゝ千年松や洲流舎　通理

泉涌寺舎利開帳　十五日

祢ゝん　係ゝる　貴船五穀祭

十一日　列見　六位以下の藝能
兵部の二者ゝ　有ものと撰びて武部
ゝる政官に名ゝ　ゝて宮量
容儀をとゝ　ゝるゝ上つゝ下
此時冠ゝかざゝ　ゝのゝ有

十五日　京　北山鹿苑寺祭　同
天神祭　社人射礼

俳　列ゝや　ゝ伸と烏帽　直角

詞　百ゝ庵　ゝ紙ゝ

十二日 百花朝 此日をかくいふ 新雨百花朝

白候 十二日天氣快晴なるいろくの木の實よし〳〵夜雨ふれば大抵二月は夜雨をきらふ

南都二月堂衆殿大續松

二月堂は羂索院と云天平勝宝四年沙門実忠建立也傳に閻伽井有是を俗に若狭の井と云此井のあと取て修法あり

(注)廉そとむ都の

南大法會 丁史

十四日 此日をとく紙といむ

十五日 花朝節 百花生日とも云 此日を花の農の日と云晴

占候 此日を蝶會 唐に花朝をもつて蝶撲會をなすと

蠶市 此日かいこの屋果うとを他らること綴親す

涅槃會 涅槃像 三月十五日釈迦入滅の日とす然るに今月八月の説やまちまちあり拠る

仏のあれ さとし 佛

破和論に周の穆王の十二年二月十五日佛涅槃すと記せり

周の二月今の十二月 流傳今改ること〳〵 ○釈迦如来は大聖教主と称し抱尸那城娑羅林の中にかれたり

之を娑羅林といふ其号れるゝ中うも沿東素福ちの係は兆厥司の更て日本孝謙の天皇

(哥) 後拾遺 光源

いかゝ〳〵のうれの座にのぞうとも
〳〵れ涅槃の仏ならまし

(哥) 今 伊勢大輔

世とともに月かたれかし〳〵と枝ゆい

あいれやこよやみるまさことひろん

(行)陸の苔。さゞ。世捨る。たゝる。路の林

(俳)死よ未て其死さらぬや死の時 芭蕉

法華の眠 とこされねとん像 基用

不ようけこい桜の花さ月 故郷 日

いろくに鶏鳴らんねえの日 楊孝

(狂)佛でも死れば迷途のちなれや

ねくん像をかけたりかけこそ 志賀

雪果 仲麻呂の都はてゝ ふるさと

紙幸も去ぬ十二日と芭蕉

嵯峨 (柱)(続)(松)。今秋清水ちる

松の踊躍 釈迦葬

なる遠さなり 蹴さなり

(俳)松の烟さうみそ 隠の死 財流

山崎賢寺 紀貫之 行基

法えこの像庵帳

大坂 天満宮 菅原日 祇園

金式文 常不舎とり人

南都 興福寺 常不舎 あり

金剛の 法華経 人形と 開

常不はは人とい不四 豊前 旧名八日

る山なり 老の

るばもつ人 餐花前夫 十八

日小花くそこ人てもちめちい

さ花を春花屑ごい八餐の屠三色

十六日 積塔 光孝天皇の 皇子 三百人

雨夜の皇子の 御 日 撥接

とあいまこ 後ひ 十七日

雨夜の皇子の 御 日 式日 撥接

レストの 花 系 金 後の小 塩

聚菴に 生 撥塔 金と 吃

京本清寺 日蓮 (開)(祖)あり

京都 通 鞍馬口

の南にあり 迫 沙 像

のこ人 妙 著 聞集 左

十八日 成本 日蓮 峯定

寺観音會式 くらはの

北六里ヶ

にあり 大 妙 山 と号す 白川 法

皇の御建立 一 協あり 修 験

者なり此日風はげしくなれば世に大無山のあまたなりこれ

十九日　貝寄　天王寺　雲今の曼殊沙華

俳る貝寄は右のうらへとりよせ白く此日右貝をとりはしの浦にあるハ彩色ようなるもの、ことなる貝寄風こゝなり

哥　續後撰　人数　前大政大臣此日の風と貝寄に

今こゝにたもたへまこなうきゝんなるの人ゝとこれ貝

俳　貝寄や弥に八青ひろへぜ地千那

観音誕辰　此日と記号の日とす今十八日

日甘しハ日　廿日　浅間祭　信州浅間嶽ハけあるこゝ

今二月をなり此月八日に山ひらを此日とゝうりをゝ

○一説に二月廿二日駿州安倍郡浅間の社厳重の祭なり是を浅間詣りとゝ

薬師あり社前に義と義うの俳ゆらくに詣るをの砂烟　乙由

廿一日　普賢菩薩　毒き沢ハ地あり釜を

聖寺院ゝ云廿二日をゝの像三

廿二日　大坂　天王寺ハ人家あり左ゝ堂と

風祭代六時堂たりし毛一舎利

二舎利をゝ伝法事あり

堂家石の義を屋に毒ハ水あり

毒ようおに入て落る蛍裏

の外かく行ゝ事天下に

教区此寺年中の法令の国

中ゝも此日代第一とす大坂

花得を二舞の屋の巳隅に

たつる廿一日武示あり

哥　係氏紅葉かゝ

からくの紅ゝ紅ゝ紅ゝと

立居ゝ紅けてあゝれとゝみき

俳　聖寺寺院ゝ伝法ゝ加如泉

依聖寺寺院ゝもおんてまにくゝ　瓢水

(俳)我ものに風しみぬるぞ冬籠　毛臨

(狂)天ものの業成すれば　春来

何のこゝろ〳〵面白ふ　こゝにまこと也

金石糸竹　勅土退屋

太秦廣隆寺

舎弟武方ふ壁像

仏世二歳帝像

京　後白河院庁参拝加茂社

の下賜にこゝまとゝにとむ所

主上新帝に雲霞殺入　北畠

西蓮の書い伝ろ　廿四日　近江八海

桓武天皇十

系孫白髪にされた

又年に始る廿日必ゝ

秘の往来とかゝくきんどゝ

(俳)さゝ波よ秘し八海の日和　雷霞

廿五日　京　小野△天神御託宣

天慶年中小野社と建

ちるあゝよ入く西の京より供物を

供これと△茶枝の市供と云氏日

春禅院に八講あり（本根源

日二月廿五日八講大宮左天

神のかゝあゝ御日も

参の者ありてゝ

二年より春禅院ゝて八講を

菅家の学生参りて

云く本朝文粋大江匡衡曰天

満自在天神はあらひと天下に

造物〳〵一人を補導し天上て

月日とゝして万民と恩除し

紀中文通の大犯月月の執

ゝもとゝ云く〳〵梵竹菴櫻宮の

元叡山住心院の住職心敬僧

都は聖堂に於て連歌ゝ始

或時　人ゝおゝて

云句に「分いゝの烟りのなゝ

ゝるゝ人と付られ」八天神

歌ありてゝ水於まふの大本名

水の巻川浪の老二巻を抜け

たまゝゝとるゝんそれゝう庵

中ゝ偽称のやゝろ弦た

てゝけゝゝの宮といつう

或曰是皆妄説なり信ずべからず
(俳)陳ハねて茶摘に伺供郡水戸

河内

(通)ぢ　今日市自能の本像
(俳)惟喬の志貴親王作村放に上
陸するといへく代くに伝ふ
(俳)在帝の勅願聖徳太子の開祖
なり天神の社うつ天慶元年
天孫と変化まします
三百六十五の名おの
日六廿
日就成不廿
日八廿
天

和の節

(詞)陽の春よかん
じて天和うなり

月令

(俳)紀八日　彼岸
三月　月のことのさ

(詞)秋二月あり七日のつゆひん
の比日を俳氏号て中日とひ
又時ふるも云諸説なし
て仏に供すると彼岸者とそうれそ
彼岸のひとしきに地して地界ともぞう

(哥)ほのぼの紫波の濱の夕日てそ
西ふさ〜なる光りとくなる　為家
(哥)西くもまよひさとうあるを終て
南を西なるぞ仏の彼岸なせよ一遍上人
(詞)接。紀書。移まれ。八日。荒ふる。
(俳)くなちれ荒ちこ年彼岸ハ支考
さうさうさひとえにきこのひ彼岸は
名我家の文もこちやもひ人なま朝雲
(狂)こるうなる十万億土ゆきよ
かのきしなるも三〜ぬ名されば
○林道春野槌にいとく或説
永の説ふ樹若薩の仏を
て超率天の御所
墓あくそこに樹ふう一月に
花ひく七日七夜にして
落る秋八月七日実生し
梵天帝釈の
の間世るの長人悪人の
化す生死紙屋紙
友曰宜取七日修善業

これ春秋七日の事とゝうさまどもし事たゞうなゝぬるや祇平石の録ま彼岸ハ日本の風俗ちのうゝし季ゝくの歳時記ふ出さう

茶の子

畿内の流俗あり七日の間亡人の日ふあてれば野菜の食類と知音の人ふおくる

(俳)彼岸過の茶ふ流ぎ紙屋庵白羽

(狂)彼岸過ぎ

我等亡母尚彼岸中

先慈譜晨偶中彼岸

見れば因之橘葉蔬供

會預設蔬齋伏乞王

靈ちい付近仰信説

趾臨敝廬為修其冥

経驚聞彼岸山路

福則存没均感賤价

九仏若号而拝奉称

謹言

奉瀆

尺牘 書簡 上中下

玉趾 (上)宝殿。御座(下)

友文。座下。飛錫

賤价(上)小伴奉告

奉瀆(下)銀鹿以報

彼岸

天王寺参

彼岸七日の乃偽ばう

出て修りす男女親さん参と神

ま帰人ハ衣れをかざり我一

ま殺ひ生て参拝とう〇ま

る初の市呂参りまひし

(俳)博くも社ぎかけて彼岸代支考

彼岸とは浪波ふ吾む日ふ潘山

(狂)内ハハひんざ波も弁ゆで

れちの世話さや汀至鷹ゆ一朝

同踊念佛

天王寺鉦仏堂

ふて法りのあり

天王寺の名ちとて廿八善薩

の画像をかけて彼りす平祇大

朔明令

念仏寺より拾来る又西門を極楽の東門にあてるとて著うう其下にあつまり西海の入日と観ずるし弘法大師も此西門

よて日想観を修したまひ

まひげん中日の弱条は此

八日をおがまんがためく

(俳)おごろうごろびんのを花の蒲丈

京 御影堂△時宗踊念仏

又條橋西にあり毎年

春秋二季の彼岸踊躍念仏

あく年世に来尼を携へ

房を制す御影堂房を新

ち号す式部光寺と云ひく

きらに仏事を謝して余念

なくれどうよ法うぐのそと

法花経ふ此のみ経あり

一遍上人

(哥)

ちねびてもひれどうべおどれ法弱の

法のみよりやびうぐ

(狂)世いこれて素後の春ちそえて

ろくの花新堂踊念仏　声可

社日

五春より立春みつめの戊の日

と春社と云ひうしこはは

土の神とあうるく土八穀物とやし

なひ五穀と生す春の農事の

よからんの式いのの秋の其反

徳と報ぞう意なう燕の春社

日に寄う秋の社日の陰

(俳)うく本ぞくと教よ蕊め斜水

社日 筆

共工氏

左傳曰共工氏子

好舟車のいくる而足の達をる而

勾龍

窮めんずとうくこと能水土と

平ぐ故又祀て社とす勾龍

と風俗通うく俗

方壇

壇と築こて土地の霊

祀る豊饒といのる

陳平方肉

前漢陳平里中の

社の宰こる肉と

月令社日 分事甚ひとし父老曰善哉陳孺子が宰たるや陳平曰嗟乎我と天下の宰たらしめば亦此肉のごとしと云々

治聾酒 社日にのむ酒を云 石林詩話に出たり

社日に酒をのめば聾を治すといひならはしたる故なり

(詩) 社公今日没心情 為乞治聾酒一瓶　兵部李濤

社羹 唐呉越の俗必羹をもて祀るとなり

社翁雨 社翁ハうるほ水を食せず故に社日必雨をいふ

(詩) 社翁ノ雨五言詞

幾點社翁雨 一番花信風

社日ノ雨ハ草木ノタメニハ父母ノゴトシ一方ハ年中一番ノ風ナリ

(詩) 社日七言ノ詞

今朝社日停針線 起向朱櫻樹下行

社日ニハ女ハ皆ハリシゴトヲヤメテ櫻ノ花ノ下ニ行遊

男女嫁娶 周礼媒氏の注に陰陽交て以て昏礼をなす時ハ天の時に順ふといへりされバ此月婚姻によろし

紙鳶 春の風ハ下より上へのぼる紙鳶もよくあがる

(俳) きぬ糸や霞なる引紙鳶　支考

紙鳶こや遠去の把せて紙鳶　白猿

(狂) いかのぼり糸あけてかぜの吹風に絵ニハかゝりく〳〵さかの　木端

紙鳶故事 風箏

箏ハ琵琶ノ類 漢李鄴宮中ニヲイテ紙鳶ヲツクリ線ヲ引風ニ乗シテノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以テ笛トス風ニフクメハ聲ヲナスソノ声箏ヲヒクガゴトシ

未央宮ノ故址

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信紙鳶ヲツクリテ遠近ヲハカリシナリ

得子 二月乙酉の日午ノ時ハ夫婦小地ニ入ル也必孕ム

初雷 仲春ニ初めて雷を

けいちつ虫動く也 ㊀ 俗ニ虫出し

とう〳〵雷のこと 委ハ博物筌ニあり

哥 古今集

天のゐかづちとどろかばかくもかるものこゝろ

おのれ人中をいさるものこゝろ

詞 なること。そろ〳〵なるかくも。おと。クミ。ひく〳〵。

能 かみなりに侍をとゝ者の折ハ 左近

「雷や他のまゝ」 ㊀ 嵐雪

「雷の姑るれや ふるの文冊

狂 みとりのかゝるゆゝしてもあると

ふらよしなくよいおもいこうりの句 遊山

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株

光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光

蜀ノ先主ノ一

一鄉孝子爲傷心 聽春雷

二十四孝ノ内ノ人

詩 雷五言對句

山鳴喬木例 滂沱無所避

木末モクガヘ

水激蟄龍飛 霹靂不堪看

蟄ハ伏ル也 龍モイル

電 肇

人君之象 雷八二月ヨリ百八十日ノ間

二地ヲイブル時萬物モヒラ

地ヲイブル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニ入ル万物モヒラ地ニ入ル入ハ

害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

雷槌

陳ノ時蘇紹ト云人雷槌重サ九斤ナルモノヲ得タリ宋ノ時沈括震木ノ下ニテ雷楔ヲ得タリ斧ニ似テ孔ナシ○時珍曰。雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタルモノナリ云ク

○本朝ニテモ雷ノヲチタルアトニテ異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロフルヿ諸書ニミエタリ

雷除ノ守

越の白山鵜ゆら人ゑ有其うちと畫ゑ書すもべ雷雛とのかるくたれ名あり

哥 後ち羽院御製

めゐの松は本陰よかく
るゐてやそらに枝のちり

候霜

哥 玄霜の日より百八十日めの秋ハ初めてゆよう来る日なく又秋風はじめてゆよう来る日なり十八日めの秋ハ初めてゆよう来る日なり

氷口祭

稲かりたれハ枯るく故ゆ農人苗代水をうゆ口をあくるもべろ湧りれば苗痩深るれば苗腐八九日を経て苗うハーるをとゆみもべあ湧らをとゆーを其水の冷暖などにとれようて水にをあらくあるもべろ老べりまけるハ八十剌に撒さーはさをてあれよさすなり

哥 夫木 師光

ますすゐをうるるてのうゐゐいくもそそ水口まろやどいまをよりの

俳 あにの八十虎とのぐ雄ゆ許八
あにのをこのぐいぐーるる芭蕉

田畑野山を焼

芝焼 早を
ハ地を焼て稔る所あり是を
火米しいハ和名やくとくゆ

て燒て後耕つくりかへす又田畑
とやくいもゝの根をくりぬく
刑とやけが燒くはるかう

(哥)　古今　業平

春日のハるゝ人なくやさうゑ所の
つゝもこりれて我もこもれり

萬葉

みそぎりゝ春の太神をやゝく人の
燒くゝぬうも我くゝろやく

(俳)　土佐ぐ名ぐ名ぐせくゝ心と撲言泉
陣とやゝくや名ぐ名ぐ角さ狐ぐ狐ぐ　左久
畑燒や土ぐ土ぐこりた鍬ぐ鍬ぐ　許六

(狂)　やさうゑ春さんくもゝ春ぐ春ぐの日暮の
亦火の神ちせ結もやゝくら人　太中

季御讀經　二月八月に內裏
中宮大夫ぐ名ぐ行ぐ。

此時僧ゝ茶とうゝひと養こゝ人
(俳)　ゝとなびく春陰經のひと茶ゝ芭蕉

草木　此部ゝ二月一ヶ月の
草木のゝいとあらむ

苗代　俊成
なへ稻の種の袋のなさ
ると川ゝに漬し
瓦性　ゝる水七日と強て俗田ゝ
苗なりこれと苗代ゝら人

(哥)　夫木
たのりゝるゝゝら川とせゝるけて
ゝゝめくゝろゝみくゝろの梅

拾玉集
長なりゝ田の紙ハ苗代ろ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

堀川百首
ゝ長せハ小田の苗代ゝゝくて
たねまく行ゝゝくゝゝゝゝゝ

(連)　苗代ゝもゝ枝ゝろゝゝゝゝ　肖柏
苗代の杖と長ゝゝの田面部　昌叱

(俳)　苗代や弟ひも絆て代ゝのみ　支考
收洗て稻の芽ゝ苗代田

(狂)　なへゝろとゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
縄のゝとゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ　良木

苗代菜萸　二月実熟大さ
小麥の出て熟

哥 夫木　苗代茱萸
小山田の苗代水のまなこに　こゝろ(?)のまゝに生ふるぐみ

俳 茱萸の実も秋さへせたる苗代田　天川

△種浸（たねひたし）　春どうゆゐれ生彼岸のころ種をあれにひたす故
籾浅よ芽出し種を下す也

詞 △たね伏 △種おろし　種ひたすに同じなり

哥 千首
種はやかれくやびくれ小山田の　たく一しほりの苗代の水　爲尹

△種井（たねゐ）　種を漬（つけ）るすを名づく

哥 新選六帖
たなきのあせのかよひぢにて　たる井のたねはやまはれのなり　爲家

俳 いかゞるの本に縄つけし種井かな　去者

△湯種（ゆだね）　農人（のうにん）種をぬる湯に漬（つけ）てゆげだつほどにさますと又漬たる種を火のかたへちらしてあたゝめるも早く生ず

△種蒔（たねまき）△種らし △種下し

哥 夫木
かのどろ苗代水をあせおとこて　今ぞ種井に種下しける　國信

俳 種下し儀よことに小棹かな　其角

△藍蒔（あゐまく）△麻蒔（あさまく）

俳 露つれて麻蒔畑の小すみか　芭蕉

△蕨（わらび）　異名 紫塵（むらさきのちり）　初生芽あるをさはこれを含んて小児の拳の曲るやうに見えるなり　長じて葉をひらく時は鳳尾の如し　高さ二三尺ばかりもあり　其根紫黒色　皮肉搗（つき）て粉として再三洗ひ製法をすれば蕨粉となる　食用ともなり

詞 △さわらび △かきわらび　いづれも和名なり

哥 新拾遺　よみ人しらず
春への日へまて外山のかすみとひ　なけきくとんあるらし　和家

哥 万葉

ぬばたまの黒髪のうへにかきなでしもとゆひのはなさわらひの
もえ出るはるのあさぢはらかぎりなくかぎりなくもとびこさわらび

哥 亜槐

心平の庭のさくらびとゆかぎりなくかぎりなくもとびこさわらび
かぎりなきいえ年もはるのうら

詞 かきもとびこさわらび。こぶしもとびこさわらび。
。のべをひる。小野山。かさぎ山。のべ

連 ゆくさのちりとすぎの歳和 紹也
「さわらびもゆる葉のねざしうゑ玄仍

俳 ふるとびの年ぶるやなぎの芽 蓮三
「ゆるらびの行末柳の柳 紬の内

狂 さうりあげさぶをうらぶーハえうゑ
まさんよくらいすもとびめーん遊山

詩 蕨 薇 詞 杜子美

雨足空山少蕨萌春深直疑
麤紫金莖 雨ハフレトモ山ニ未ダワラビモエイデ子ヒ春フカク
ナリテニヨキくトハヘルト 伯夷不食
紫金莖ハワラビノ名ヒ

周家粟未必先知此味清
昔白夷カ首陽山ニカクレテワラビヲ
喰ソメタルユエニ今コノ味ヲシルソレニ
デハシラナンダテ
アラフトトリ

詩 蕨七字對句 詩礎

承露未開仙女掌 元無骨
ワラビニタトヘタリ

擎天先出小児拳 已作拳
口上

口中藥 わらびをやきこなしおろし
まやきこなし昆布の石付黒やきこ
をこ合せて絹ふたくこ金こぬし

奥御之藥 こらびの粉と孫く付る

蒲公 異名 僕公嚢。蒲公英。黄花
地丁。白鼓釘。金簪草

和名 ふちな つぐこさこもいみたん
ふつぐこと云ようぜさるるぐし

哥 花さくもいやこのはぐみ草
若ゆくき世の春をまれこそ 公通

俳　たんわら　藻も一さし春ごとの　惟喬
　ふり袖の端ながら　野枝

狂　たんすいはこし
　ん　ほく　絵とくやはしろの　左久

杉菜

土筆のたけて手あと迷たるを　或ハ豚土筆に似て別なるとぞ　ある艸おうこもつへ
太和本艸曰杉菜　松葉に似る　名づく

哥　藻鹽草
かこ山のえけがこのうに生ひるなり
　ぞ　ぞ　ま　う　せ　ものつくしこうる

俳　さつくびもこ　こけたんやの松ふれ　言水

狗脊

の脊骨のごとくぶつ　の
かこらわらびと　ひる似て味ハおとる故
　ぞ　ら　び　名づくなり

異名　尔紫蕨○綦○迷蕨。

俳　狗脊ハこらびのうへの一品也　春理

枸杞

本艸に曰枸杞春ハ青精　名づく　名ハ枸杞葉
子

枸杞故事

逐犬

朱孺子幼ニシテ道士王元正ニツカフ巖ニ居テ一日水ヲ汲クルニ二犬ヲ見ル孺子是ヲ逐フテ抱杞ノ叢リ生タル下ニ入ケリ是ヨリ是ヲ服シテ仙術ヲ得タリ列仙傳ニ王玄真ト云フナリ

俳　枸杞めしと書うる　抗元防　瓢吾

痔薬

枸杞の根つきたくらうし　煮て葉へ洗くべし　痢を治す

五加木

異名　文章艸。八角茶。五佳。
一枝ハ五葉あるゆえ　若葉をとりて食用とす

俳　芳傷の腸の　て　ふ　ん　加木ハ涼平
　都　ま　こ　ま　ま　五加木　甚枝

虎杖

酸揷箪　酸杖の皮ごとう
含人に味す　表に名付三才

名今ハ出さうこ　名　タナビ　山中ここい
高サ丈余のおあり　夏秋花あり

虎杖筆　**淡路宮**（あはぢのみや）　日本紀反正天皇淡路宮ニ生レタマフ井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ時タチヒノ花オチテ井ノ中ニアリ故ニ御名ヲ多遅比瑞歯別天皇ト申シ奉ル

（狂）同なハ捨られ流れてひようろくとかたけてもとろ沼の虎こゝろ　挑綺

韮（にら）　異名　長生韮・翠髪　和名　古美良（新撰字鏡ニ出タリ）美良（万葉集ニ出ス）

中心茎を抽きて白き花をひらく蛇生のものと山そらとらへたり

（俳）結ふる香て良き韮のみだれ髪　陽水

耳へむしの入りたるを出す　生韮のしぼりけを能く合せ耳へ入れてむしの出ざることをよくそなへおくべし

蒜（ひる）　異名　美菜・卵蒜　和名　比流（和名ニ出タリ）蒜ハニホヒナリ　ハニクムノ心ノ香ノ臭ユエ名ヅク　野蒜　葷菜ハ野人皆食之

韮蒜故事　**倭建尊**（やまとたけるのみこと）　日本紀景行天皇第二ノ御子日本武尊東夷ヲ征伐シ王ヒ山海ヲヘテ信濃ノ山ニ入既ニ峯ニヲヨンデ大ニ餒ツカレタマヒシ故ニ山中ニ御食ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ王ノ前ニ立テリ王アヤシミテ一ツノ蒜ヲ鹿ニ弾カケレバ眼ニ中ツテ死ニケリコヽニ於テ忽道ヲウシナヒ出取ヲシラズ時ニ白狗来テ王ヲ道ヒキテ出ルコトヲ得タマフ

源氏品定（げんじしなさだめ）　ささきのちにあるむすめにちぎりておとづれたるにむすめこれは蒜くひて候へバ其香うせなんのちよりたまへといふをききてさゝかにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふかへし

薤露之歌（かいろのうた）　あやなき　齊の田横が門人歌ヲツ

クリ　薤上露何晞明朝還復落
コレヲ薤露巷里ノウタトイヒテコノ
人ノ葬リヲオクル時ニ
ウタフタリシナリ

夜雨剪

郭林宗友人ヲ見テ夜雨ニライトハス

韮ヲ剪テ炊飯ラツクル今
洛人コレニナラフ　杜甫詩ニ

詩　夜雨剪春韮

俳　やゝ〻やら数ら出たの班ひる邦野坡

韮摘と張君の筐ふるこゝろれ　言水

班ひるもゝ〻ふる本の葉の茶碗　芭蕉

狂　後ひて捨ておいてこうえんうの
味ゝにこゝ白ゝ　平田

妙藥

瘡藥　にんゝく三　烟草三分　右搗合せて
ゝべどゝ

疔ノ藥　班ひるの肘の内らゝ
一九ゝゝゝゝの
ゝ付をゝべゝ男い左り女い右のゝ
内ゝ班ひる葱やゝ搗て

霍亂藥　りゝ孔せんとゝの的い
大ゝんゝく巴五ッ　腹をゝぎ跡の
ゝゝのあつき土一塊に水を
ま世汲立のあにゝくの澤どゝう
に中へゝぐべゝぬゝう

腸藥　班ひるの実手て粘の白
ゝをゝゝ搗ゝて用ゆ

又藥蒜　をゝひて口中のふはひ
を去るゝは腐ゝ酸をゝ
かゝてはゝゝぎとゝう

水葱摘　一名蘚菜

○三才図會に云ふ水葱
あり紫色作ゝなきこゝゝ三
種あり○深尚○沢搭板○水葱
ゝゝの名邪掩なり

哥　万葉
去歳ゝとゞの里のうゝこなきゝ
苗有ゝゝゝふゝゝあいゝゝにゝん　大伴宿禰

俳　水葱摘上なゝ姫もゝゝ初ん　半月

蘆花 異名 護生草 三線草 小鬼瓜

とりゝの花白し 小鬼瓜

草の茎をにたらうへまに引張
ひけバ三味線の音ちかの花の撥のごと

哥 家集 好忠

屋の面なるの花の咲ぬるとをおりゝ
ゑやそ侍ぬ色ぬるとをおりゝ

俳 ようくれば芒の花咲垣根外芭蕉

狂 ひくらの山三味せん若の名をこそ
なろ水とそこそ引たけ山ゆらめ鯛一

菜花 菜らん 菜の花 菜の花 蔵し 違二

俳 ゆるの花

大根花 白方 大根の花 白方

俳 大根の花白し

髮草

俳 かゝる白髮を孫の下
まで若きれ 蒼室

末黒之薄 袖中抄に州の
末黒とをゝ

一説ゝ末黒ゝの末の末の末の末
とゝ末黒ゝ末

哥 夫木

下もえのすゝろをけらふまゝ
やけのゝすゝ紅葉ゝ

俳 まゝ角ハ角ゝよすくろ紅ゝ 桃青

草芳 萠生る草のかんばしく
秀ける草芳

俳 芳ゝやゝふきの山のゆる解きて才麿

詩 芳艸之詞 文選 鈔 軒

芳草生兮萋々 王孫遊兮不歸

詩 芳草七字對句 詩礎

情如芳草連天碧 穿巷陌
三八二ヨリ ヤウクハウヒメモスキウ三ハ二ヨリ ヤウクハウヒメモスキウ

身似楊花盡日狂 如有情
カラダハアツヒアリクゾ

草若葉

若草ゝいゝて

正月の季ゝ沙ゝ長ゝ
なるとゝゝ菊の若葉ゝ蔦の
口か葉ゝ萩ゝ

俳 若ゝ紫ゝ葉

[illegible]帳[illegible]牧[illegible]けり　[illegible]　支方
[illegible]ふ遠坂ひやくさまろ　[illegible]

荻之焼原

荻のをぐろ　萩の芽ひいろ。萩の芽ひ
初る黒き芽あり是を焼や
いろ〳〵其外説いろ〳〵あり
いもぐさ[illegible]びらうあ〳〵ぐ
爰ふ[illegible]おぎいもげさ力
熱名し心得てよろしかるべし

俳　[illegible]

[illegible]

哥　新千載　寂蓮

[illegible]
[illegible]

俳　焼くるもたぐ[illegible]萩の[illegible]雷安
[illegible]　東鍾

芦角

芦の雅角の祖芦の葉
第。○葭ハ芦ノ[illegible]

哥　萬葉集　石川女郎

我[illegible]耳よりく[illegible]ひの
あ〳〵[illegible]せ〳〵[illegible]

連り出て[illegible]　絶巴

俳　[illegible]角[illegible]ハ[illegible]　李吟

狂　かぐろなくあ〳〵[illegible]
[illegible]

詩　七字對句　野相公

紫塵嫩蕨人拳手
碧玉寒蘆錐脱囊

艾摘

通俗蓬の字を用ゆ法
なり新法ともさるる
又食あるよもぎなり

哥　家集　好忠

あ〳〵小田のこぐれたねのうるこもき
今ハまこ[illegible]ひこぐるろ

夫木　俊成

なを[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]れてもあれ[illegible]

百人首　實方

かくこぐれえやハ[illegible]
[illegible]

(俳) かさげうろ妙なるれいのまゝ 由水
ふり袖のころわ白ひなよも花 晩水

妙薬 艾をつて花脱肛を浸に 糸せんにて洗す 疾ようて

△若紫 (異名) 紫草 日に向へて用ゆ根の
皮をん衛布を深め背へとりて 衣を深めしえ色をそりなるを云

(哥) 伊勢物語
かすがのゝわかむらさきのすり衣
しのぶのみだれかぎりしられず

(俳) むらさきのえむらさき花やすり 立圃

(狂) ちりぬるもむらさきはむらさきにて
そさ花のはらくへきりまなら

△接骨木花 其葉に花 つて花の葉
いろを数十花 攢簇す 臭気あり これを
花で後は葉ふありて 木を蒸して打撲
傷損を洗ふて功有そのりたに骨
を接ぐの文やあたり

(俳) 関かの世に笑ひし接骨木 覚来

痢気薬 たづの木に其芽入ぜんべ 五分ばん

△銀杏花 (異名) 鴨脚 ○花の色
是て落つる花よ人見ることろ八稀く

(俳) うらやまのひるうの張志や花盛 芭蕉

△紅梅 そろ花ちは色にて桜のごとし
香もつよんなど似さう

○鶯宿梅 和名八十卅四二○実の色花紅
梅なり一名に鶯宿梅く語り

○麗枝梅 和名一二ヤカタダイ ○花きけり
実大ひとさらず花一本につらなる

○紫梅 和名スワウカウバイ ○花紫をまれ
びて出るの色風ち毒さもかへ子

○朧梅 花大にして梅に似とり二月のまゝ
花ひらく京山崎来門の堤のかたすり

○絲桜梅

花のかたに花紅梅 濃紅梅 薄紅梅
ありるもしくれ撥紅梅 等にしるも

(哥) 新千載 元瀬
かるとのときやまされ紅梅の香
くまさのにさく白ひあるこの郷

(哥) 新後拾

ふりかゝる梢の雪の散おけよ
それる井うすき紅梅のそくれ

哥　後拾遺
梅の花香はそこに白くとも
うたがふべくもそこにぬれされ　道遥院

哥　家集
梅の花紅ゆへ日数ふる
面のそこは枝にをくけさ

哥　類類　紅梅遅　雅世
まそふくき新猶の梅の花
為こそ梅咲ぬ　ゝとそこそ

詞　朱の房。紅の実。うゝとくゝく
。林の木末に彩り。也ゆ〻ゝ。
いろ〻。紅のこそあ。あそはの。赤
つむこゝのいろ。紅のゆさにら〻く

俳　紅梅は巨燈の火を也づ〻ん淡人
紅梅に見りて老ゆ衣角
鈴ひくやあてる梅の為濃く紅

狂　春もこゝあひくちの実ゝ紅梅の
紅梅詞　貞柳

路入宮家百歩香隔簾初識漢宮粧（三千ハタノヨキ屋ニ入テ粧テミレバ紅バイガアリテ其ハヨリホヒハミスヲヘタ見ーナルガ漢宮ノヤウナルゾタ）直疑夢到昭陽殿一簇軽紅洗淡黄（昭陽ハ前漢成帝ト花王ノ屏タル）

殿ナリ紅バイヲ見レハソノ殿ヘユメノウチニキタルヤウナリ志ヨリ美人ナドヒトムラガリニ鮫ヲバアラフヤウナリ

詩　春半花繁発多憑不奈寒（春ハナカバナレ花ハワヅカニ発タリ）北人初未識渾作杏花看（今ノコロ花ーサカントハエ知ニコヨリテ紅バイヲミテモ梅ーハ思ハス杏ノ花カ思デアロ）

詩　紅梅五字對句

詩　紅梅五字對句

照溪如濯錦（カゲイ影ガ溪水ニ写ハ）嫩蕊融紅雪（雪ニ紅ノ）

隔嶺似流霞繁蕊簇絳絹（花ヲ上ノ七ル所ニ）

詩　紅梅七字對句　詩楚

春氷薄染燕脂片　香不盡
寒日晴烘蜀錦机　酒初薫

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

繡筵　壁上詩

サカニ二開ク時一婦高キ髪ニ大ナルの袖シテ高ラニ倚リテモテアソビ詩壁上ニ題ス

南枝向暖北枝寒一種春
風有西般憑伏高樓莫吹
笛大家留取倚闌看

状　告紅梅ノ盛文　尺牘

庭前の紅梅名体冠花
前庭　満開

乏孫潤お見やい閑く拝
蜀綿業田

人数三人お招待
足下典二三僚　奠

弁像奉掛連歌お催
聖像　共暢觴詠之懐

度号早く出て下い
持幕　侯

尺牘　玄蕃上中ト記ス

満開　芳発。芳妍。綽約。明媚。馥郁　遨士　吟客。佳客。
逸人　足下典二三僚　上　公典同
遊　中　君且負僚　暢觴詠之懐
上　将駢吟筵　中　催寛興之會
欲試賞遊

状　紅梅返事

拝く連歌お寄恩石紋
梅下續詠之催趣喜々雀

多和に花出席て仕い
躍　豈不登臨
如何ぞ愛惜流水の上に
文楸　附馳使

尺牘　上中下　去留と紀と

催趣　促遊。展懐。遨宴
喜々雀躍　快衆心。想甚欣然
(上)新快万衆(中)何喜如之　豈不
登臨(上)歩而捧誦(中)詣鏗金
邑(上)入廣夏受奇璜(中)馳
騖而容吟慰(中)参扣宜謂愛
馳使　介子。僕士(上)貴奚。
蓬使(中)嵩伶。走力。銀鹿

八重梅

花の八重なるへ
けれとも八重の七重も開いむ〜〜
狂　紅波はの梅をつくりとか

(俳)八重梅や尼の
多の白毋の墓　蕭　座論梅
花浅紅多く葉多く実に枝
ごとに四五顆むすびてもて
あり人のわしらうつくしう座と
あるそのかたらへきう
越中梅　花大ふして白く淡
紅と蕚と淡紅に似る
黄梅　迎春花とも云梅に似て
梅よりは長く高二三尺よりは
正月に開く故に迎春花とも云
(俳)髪も黄ばまずまず春の梅　鬼貫

初櫻。初花

早く咲く櫻の惣名なり初
花いさたそある意もあり尚
三月草木の部かくいい

人九

(哥)万葉
位の江の里に見しうへ初花の
ましえつ色を忘れあるかも

哥　續後　伏見院

咲そむる山の花のうえそめて
君遠にうくるる岩の志ゝ毛

哥　新古今　家隆

もろんへとうんんさのべしもれ雪
たつたの山れみざくら　死

待花

花のもとにはやそも咲ぬ　と号人

哥　家集　頓阿

とゝうへて巴丈の木の茅も春雨に
彩はまたなさ山さくらうゝ

哥　新拾遺　後成

山桜咲やらぬ内にかくれてゝ
まゝとてそんなる志れ雪の月

俳　あやめ人花れ初　そわ咲彩　霜春

狂　まゝ咲うくとて彩ゝゝ花
本の下にうゝれ
ゝうして　鳥有

糸櫻

たちう桜とも

いひ無糸ゝうゝ
ゝるひゝくれさくゝう

哥　あすもこんまちう桜の枝胡ゝ
柳の糸よむすはられう　後頼

俳　百すちも志の乙あゝ糸桜　野坡
糸桜色も消ゝ　京甫

同　吹い屋も掃ゝうゝとゝて、北枝

狂　たくちの屋に咲なる糸さゝ
むをんた海のゝうゝてゝらん負大
ゝるゝゝゝゝもんたのやうゝれど
今ゝいいゝで　桜ハ木端

姥櫻

短　一花

密て志ゝ乙友ゝ老女の歯ゝ花ゝ嬢ふ

俳　花嫁といれしいゝ焼桜　立甫

狂　歯乙ゝゝうゝい桜ゝいゝ全ゝ
花ゝゝゝといゝれまいゝ　左柳

児櫻

花白ゝ乙花雛内
抱てゝゝ本ゝ花俳

俳　犯人のゝゝるめに　孫て
せん見ゝゝ　鯨花

一重桜

一重の桜ゝ乙

哥　毛木　花ゝゝおゝゝゝゝほゝゝの桜花
たゝひゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ

㊗俳　咲て散る一重を一重桜とぞ　千丈

◇彼岸櫻

彼岸の頃よく咲くゆゑ十日まへ春分のころ咲く花桜の一種なり別名なるべし　来祥

㊗俳　我仏のうそも花咲彼岸桜かな　識目

㊗狂　春ごとにさきいとうなるやまとのすらなきまでちるひがん桜は　貞木

◇熊谷櫻

よく咲く花一の谷の魁の名に名付花盛なる熊谷

【種植】

草木の種まき植やう接木なども記すなり

接穂　異名　壓木。盤砧。接頭。小虞子。花ともあれ。

凡そ草木いづれも接とつぐこと二月よろし　桜はその肥盛なる陽に向ひたるところをえらぶべし　接間あける其皮と骨とを合ひちがへぬやうにすべし　春分と秋分とするまでにつぎて其のちに接木は

やまかく接木をはせば酸きうれし　柿に桃をはげば金桃となる　李に桃を継げば李桃となる

㊗哥　新撰六帖　光俊

つぎまじへのもと木の花は咲くて八重咲けるたる花桜かな

㊗俳　小刀のそれからかへぬ接穂かな　蓮二

月影にはもまた接木の時　泉水

接木の種のその後の花やかたかり　金雨

接木にかくのぞく接木かな　堂

茄子栽秧

まさひ植ゑは硫黄つちに皂子一つを根におきて泥をいれて植ひおけば虫をさけること多くてよくもろこしふれ一尺にみすのおある

◇西瓜栽

肥地に坑をふって坑ごとに種を植ゑまくし苗出て後根の下に土を壅く盆のごとくして多く鋤をいれてすけば瓜多し

種蓮 ころねを乾のぜひさるうるふひらる泥を

栽べし初油とろ

挿壓 木の下枝の土にうえ泥をまぶきう自を入またいめ泥土をとせ其枝の上よも本の方まかに土を分末の方を分にい土をうけず漢あと時く土の上にそくべし次の日本木の方を切りて五月下旬に挿し栽べし五月梅雨の時分根を生ずるものと知るべし今月木犀躑躅等をとせ法にごにとるにより

壅培 根本の土をやわらげ養泉を分べし石榴梨海棠

等に肥を充糞ふ法へ肥糞ふ或ひい馬糞と用へし

挿木 此法ハ黄土と日にて干細末してゆと等分に篩

ようにすとへ六七寸はうり地に死枝を馬の耳はぐ

きかさめて枝を

にそぎ[illegible]し大きさとする別の木の枝にて先穴とあけ其穴にそぎたる枝を挿五寸ばかはさみはく水をそそぐ陰地より或ハ上又おかひをとるべし一日と長なる枝に至りて根を生ずるなり枝

栽べし今月に本に挿たる枝

檜柏 樅 丹柏 羅漢松 海紅海棠 山茶花 石榴 山梔 薔薇 黄梅 櫻等し

根 法草藥を採るべく二月八月を用べし

抹藥種 法存中が考法へ

二月八月の茅ばに八月ハ苗いなだるまず成よろに茅花のうて茅花ハあしく宿根あるお

い則苗出来ていまごゝ裏時取べし根なりていまごゝ裏

修樹 菓樹の小枝枯枝切る法実とひもぶと大きなろ

生類

此類よハ二月一ヶ月の生まれるものを

果鳥 此名ハ俗間カホノヽヨ鳴

哥 夫木

ゆるゝるこ宮のふれとこゝろハ
ふゝゝとうそ花あゝるゝ

光俊

哥 万葉

鈴ゐ出てきうくゝ呆きなんぢ
ゐくゝ立まゐ附とうえずゐく

俳 貝ゐや二尺の尺二寸ゐて方義

雉 異名 山梁 野雉 前溪

の高祖の夫人名大后の諱と

雉とゐうて雉を野雉とも山雉
より今も稀雉ともいゐう

和名木々須 ○昔ハ雉子魚ハ
鯉を雉と云 ○ほとゝぎすハ
雉子ほたゝきすの略 ○ほとゝ
ぎすハ

其ゐ名ゐうにて雉ゐ
ぐゐに枝のつゐ枝に
哥ゐぐたのむ名ぶ
と云ゐ

詩 雉七字對句

田夫就餉還依草共啼花
野雉驚飛不過林起平原

詞 雉之詞

白雉振朝飛声来表太平朝廷
二白雉アラハレ年号トセシコトアリ 楚郊疑鳳出陳寶
若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現スル
似童子懐仁至中即作賦成皆雉
事ニ故事ニ 冀君看飲啄耿介獨含情
未食スル体ヲ見ヨスベテ
諸鳥ニスグレテミユル十リ

雉之故事 **傳世悲** 春秋ノ時衛公
嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル
ノ女齊ノ太子ニ

カ遂ニ帰ラスシテ死スツノ
傅母コレヲ悲ミテ女ノ常ニ
ヒキシ琴ヲ塚ニモチユキ弾
ケルトキタチ〻チ塚ノウチ
ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ
見テ傅母イヨ〻カナシミテ
琴ヲ鼓テ雉操
飛操ト云楽ヲ作ル

童子不

補　魯ノ黎王中年ノ今トナル其
所ニスミケル童子アリ雉ソノ
傍ニアレドモ捕ヘズソノ故ヲ問
ハ雉雛ヲツレタレバコレヲ捕ルニシ
ノビズト答フ是黎王ノ政今邪
ナキニヨリテ玉境ヲ犯サズ鳥
獣ヨク化シテナレミタガヒ童子
コノ仁心アリコレ三異ナリト云リ

燕△同巣を

和名豆波久良女
異名 乙鳥 乙人喩声ニヨルナリ

玄鳥ゲンテウ六色ニ○鶩鳥鶩鷺くれと鴛鴦つよ鴛鴦の雄の鶩鷺と鴛鴦の雄の鶩鷺と鴛鴦

波波 彼彼典ウテ彼彼ハ彼ノ義有
天女 人ニ恵ヒ人ニ恵ヒ天女ヲ生ム天女ヲ生ム号

○春来リ秋去ル甚ハタ忙ケル
ヒ甚捷シ直ニ翔リ仰キ
ヒ見ル化ル者ノ乃ツ〻ホ〻ヘアラ
ヒ人家ノ巣ヲ作ルヨリ

哥　建久元年百首　定家

ヒ巣ヲ作テナレ〻ヒ人ノ住ベクヒ
ヒ恐ヤナクテ法モ学ベシ

哥　家集　頓阿

ヒ玄ヒ古巣ヲ捨テヤ秋ノ
ヒ宿ヲ求ベクヒ

哥　千首　師兼

ヒ玄ヒ春ノ日ヒ風ヒ吹ヒ
ヒ玄ヒ日ヒ暖ヒ春ヒ来ヒ
ヒ玄ヒ来ヒ

哥　毎日百首　為家

二月ノ末ヨリ春ノ来リ
ヒ玄ヒ来ヒ

詞　ならびすむ。ひめとも名異名ナリ
○数る。古す名○て。新ス巣ヲ作ル。

居場。かつ〳〵ぬ蛩つ。あゝ
又ぬる糸。かとるとゝぐ〳〵
連 ゐの月とかる彩殆の蕣が肖拍
朋 ほとゝぎすに対てゝ山鶯過ぐ蓮二
殘をゐる孤蕣の紙ぐゝか 殺水
宮ゐもとゝけ蕣や社の石 向隱
心の殘に蕣をうゑを入日れ 其角
捨ても捨ても捨ぬ蕣うゑ 去来
社 色里に月をうばるゝめつぐゝめ
うつゝ〳〵いとどゝ〳〵てや来る紫笛
たてさゐも様さゐに〳〵も花ぶものを
ほゝゝ〳〵ゝといゝて〳〵ゝ八舊道

白樂天

詩 燕之詞

羽族知机社日来翻身尋
主入樓臺社日ニハキタルヒルガヘリトニテ巣ツクル家ヲタヅヌル 拔雲掠雨高
還下度柳穿花去又来
其飛カケルイキヨヒハ雲ヲオカシ雨ヲクゝリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲクゝリ花ヲクゝリテ行テハカヘリスルナリ 両翅拂殘
花露水一毛不染地風
埃其飛ブツバサニハ花ノツユヲハラヒテ地ヲ吹ク風ハカフムヒトモスコシホツリモカラヌ 烏衣國裏風光好
養子成時便帶回烏衣國ハツバメノ住ム国ナリ其国カヨロキニヘニヲヲヲヤシナヒエテハ又子ヲツレテカヘルナリ

詩 燕五字對句

口上

風簾雙過影 焚遶烏衣巷
画棟並捿身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句

羽翼不沾寒食雨 紅春雨
梦魂應遶落花泥 逐暮雲

燕 燕子國

詩礎

唐ノ王湖毎ヲ邀ル三舟破板一枚三

取ツキテ一ツノ島ニ至リケレバ人来テ王榭ヲ見テ是我王人ナリトテ弓ヲ宮室ニイザナイムスメヲレバ榭ニメアセケル然ルニ其人三十黒キ物ヲ着タリ榭ムスメニ其故ヲ問テ是イカナル國ゾ答テイハク烏衣國ナリ其後榭家ニ帰リ梁ヲ見ルニ例ノゴークニツノ燕サヘヅル榭コヽニオイテカノ止ル所燕子國ナルヲヲシレリ

石燕 陵零

山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テイケルカゴトシヤム時ハ还テ石トナル

生高

詩經天命玄鳥而生商○高辛氏ノ妃郊禖ニイノリテ燕ノ巣ヲヒロヒ食シテ契トイフ子ヲ生リ後ニ有商氏トナル

玉京紅縷

宋ノ姚王京カ家ニ燕巣ヲツクル其子生育シテイトモニ去ラントスルトキ玉京カ臂ニ集テ別レヲツク玉京紅キ糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ明年ニタ其ハ糸ト共ニ来リカクノゴトクスルコト六七年ニシテ玉京死シタリ燕ハカナシク鳴ワタリ終ニ塚ニ至テ死

避戊巳日

十日ハ泥ヲフクマズ廣義見ユ

貞燕

元ノ元貞三年双燕柳湯佐カ家ニ巣クフ或曰雄猫ニトラレケル雌燕其雛ヲ哺翼ナリテ帰ル其後毎年雌燕ヒトリノミ来リテ同巣ニアリケル六年見ル人感号貞燕ト云ケル

妙藥

[illegible]藥 蕊をこそとるこゝして食べし

便毒ロヲワケル 燕の巣へたしるいは年寄子ぢうら多にして醜を付ビ

歸雁（きがん） 異名 陽鳥。霜信。羽書 使者 △今来のかり △いぬるかり

△小へかり △かりのなみれ △かりの名残

かり風呂 枝かりのこゝろ附木のふ

枝をくハへて来り津軽外の濱辺にをて並ゐ帰る時是を含へて帰る

ある木ハとらまし雁の捨木と其木をひろいあつめ風呂を焚て

施行すこれを雁風呂といふ故事あり秋の部に出を

㊞ 古今 躬恒

春くれハかりかへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

㊞ 後拾遺 國基

うすゞミにかくたまづさと見ゆるかなかすめる空にかへるかりがね

㊞ 家集 定家

春の夜のあはれ八声の鳥も鳴ぬるよたのむの雁のいそぎさそらん

㊞ 石陰かくれに海。帰かへれ行。かへるかりに声あら鳴のかりも。帰る北来

㊞ かへるさき雁が○送る折から 宗牧

雁かへる月のから琴ゆびならさる 紹巴

雁もまてお浪とこよひ雲の月 宗養

㊞ 雁の音おぼろく行百里 遠二

明れと新もかる帰る 嵐雪

表裏しかた見へと別まる 野水

㊞ 節なるか下ひもちるか北方の

こしのかたへ帰るかりがね○ 貞柳

弦は紙さと見れぞする哭ゑの

志ろきハのらとせん帰るを 紫笛

㊞ 帰雁之詞

洞庭春水緑衡陽旅雁飛

洞庭湖ノ水カ春ノ色ヲナス時ブンニハ雁カ旅ダチテ衡陽

差池高復下欲向龍

門帰 差池トツラナリテ高クトヒ竜門ト云所ニ帰テト云トヒユクゾ

詩 帰雁五字對句

巳辭霜雪苦　玉塞情何極
窟送稻粱肥　蕙葩夢亦稀

引鶴　引鴨

多くあつまり居るを引鶴と云
るゝ○相鶴往こいとく鶴ハ仙名
あつるに陰より招ぶ七年に小髮し
十六年に大髮す百六十日にして
髮止まる千六百年にして形定
る巖棲を尚ぶ放逸を高一象
天くまより放逸に成て禁
其啄長く前に刺き後後の指
経し天壽量べからざる羽扶禁
長仙人の猿猿と旅時一拳千里
百六十年にして雌雄相視て孕
千六百年ようやくとのくて
食をとるすべし聖人位よ
あれば則ち鳳と飛て翔る

哥 引鶴の身に方代ゝ絶ぬ
御代も共尾の滝の水とけき
詞 もろ声。まるゝ鶴。あまを。
多を井に寄る。鶴の色ごろも。
るをゝ人。あのつる。かまゝの
いつぬき川。えなゝすあゝべ
俳 引鶴やゝ法の梅の三三編 文秀
引鶴よりとぐゝ氷も別ゝる雪止

詩 引鶴之詞

寄跡含香舍淹情加樹林
ツルガレキ〳〵ノ官人ノ方ニヤシ
ナハレテヒサシクサヽルハオノレガ
任ム樹林 長鳴如有訴狎俗
ヨリモニサル
川辺如今 鳴クハ何ヤラ訴テモス
ルヤウニ三ヘテナレ一ア
今ニ 不染風塵色常存霄
并ル
漢心 其サマハ大空ニ并ルヤウ
ニヽヘテスコシモ俗ニハナレス
會應王子晉接爾向嵩岑
イツリハカナラズ鶴スキノ子晉ヲノ
セテ高ノ山ニユクテアロフトナリ

鶴の故事

林逋籠鶴

林逋孤山隱居シテ常ニ二ツノ鶴ヲヤシナフ縱セハ飛出テ雲ニ入テタノシミ久シウシテ又籠ノ中ニカヘルカメテ西湖ノ寺々ニアソフコト常ナリ若其留守中ニ客ノ来ルコトアレハ林逋カ童子籠ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ林逋カアソブ所ニ来ル林逋コレヲ見テ家ニカヘル

上揚州

小說ニ曰人三人アツマリ各其オモフトコロヲイフ一人ノイヘルニハ揚州ノ刺史トナラン一人ノイヘルハ鶴ノ室多ホシキ一人ノイヘルハ鶴ノ二ノリテ天ニノホラントイフ其カタハラニ人アリテノハク我ハ腰ニ十万貫ヲ纏フテ鶴ノ二ノリテ揚州ニ上ラン

化鶴

神異錄曰玄宗沙苑ニ獵ス鶴ヲ見テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西南ニニク時ニ益州ニ道觀アリ道士ドモ一四度来テ遊ベリアル時徐佐郷トイヘルモノ外ヨリ来リテ弱子ニ謂テ曰我山中ニ行テ矢ニアタレリトテ則其矢ヲ壁ニカケテ後日必矢ノ主来ラバカヘスベシトニ云テ帰ルハタシテ後日明皇蜀ニ幸シテカノ道觀ニアソビ其矢ヲ見テコレハ我沙苑ニ鶴ヲ射時ノ矢ナリトテ此時徐佐ケイカ鶴ニ化シタルヲ知レリ

客来弔

陶侃傳曰侃母ノ憂ニアタルニヨリテ墓ノ下ニ在リ忽チヨヨンテ墓ノ下ニ在リ忽チ二人ノ客アリテ来弔フ哭セズシ

テ退ク　倔コレ非常ノ人タルヲ
シル　隨テコレヲ視ニ雙ノ鶴ト成
テ去ル　○右詩故事共引鶴
ニカキラス鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巣　古巣　壞巣

云ふ多い宿とも云ふ　独り多へ止
とも云ふ　衆多い集ると云。五雜
俎にいとく多の巣と住くへ
其巧を人なるたりに只一口両爪と
以て結束ぬ其堅固なる事大風
ふ本と拔とも巣い終に傾こと

俳　うゐぶ抱法
かひのうちにきの人へしたるの
なのさ人なりへうもなしひゆるうる

俳　名ぬ巣にふとして兵據却　蓮二

孕雀

巣ひてまるとと孕雀堂舎
其子のは若ふるの如雀とりめ
なるし　雀子　家付　又朽本ひと

哥　新撰六帖　知家
人にうゑ花のひるのひなれつく
去ばしも分とをとをざるらん

○　源氏若ふ
ひゝさ花のうへの匂ひるすぐめ
のるといぬきう花はうゝるると
いつることあうこのゝをあう
隙るとうのおの名よとなる氏

哥　いはしへのいぬきうかひをとうを
たちあうしやうしとてうらん

俳　一見ハ巣ふすぐめ花あるこ小五遊
花るやあかり隙るに外の法基角

妙薬

意鷹の巣　生さる森の
角とれこと切て金瘡又
拔土多ふ入息をはめまやき
としあうそおづ用もべ——
なん産の巣　すめの巣とまや
きは香白正鶏とこ葛し務こ
十茅ふう内の男ふの小便と
あさしかきえてあもべ——

腎茶 崔壮羽 氷砂糖一斤酒一升 炭火にてせんかぐ 夜八時とます

松毛鳥 菊いたくきこゑ似たる 名こ春松の毛を食ふ

寂蓮

哥 夫木

源山木の香ふる巣ようゐれ茶て
新酒とつくへ松むしーつくつくし

俳 松むしーるるもちとせの天乙女 負室

孕鹿 九の月こーて一子を生とのうり○万葉六 鹿
のこのひとりと桃羽にとりめり

俳 死へまの猟の後に母鹿 白羽

鹿角落 角解ともいふ○麻生て三年にて其角自落る

俳 足弱の後ら吟 麻の角 潘山

流すまふの後の滝見 麻の角 来山

妙薬 産後目まいの茶 麻の角と
はぐきかさの茶 死て戻と章侯る羽ゐる

麻の角美相山梔子
と紫がに粉とひぬりかけとよ

妙術 角の角とあつ〜かゆするこ
勢骨と加えて煮て飲すべし

蜂巣 蜜に蜂巣の内よ
たくして冬食べ

蜂巣 蜜に蜂巣の内よ
たくして冬食べ

哥 定家

うきて世をうる中の軒に住蜂の
さすらふなれぬいと〜人あうう

俳 効受院蜂にあやまる 平賀

蜂の巣や干たかぐ〜もこうこ頻 凱三

まふ盗鳥のさくれ〜蜂の紙幣 支考

狂 夏つくり蜂うて仏さう蜂の羽と
たくさまもてふふ〜ととつく 加本

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為
酒花為糧 蜜八千八人間ノ米ハク
ハス露ヲトツテサ
ケトミル花ヲ食トス 作蜜不忙採花忙

蜜成猶帯百花香　蜜トスルニハヤスシ花ヲ尋ルハ人ノ如シ百ノ化ノ二ホヒカアルノ

蜂故実

蜜糧　葛仙翁容ト對食ス客奇戯ヲ見ト云葛仙ロヨリ飯吐クミナ蜂トナル冬ノ間ノオトバミテヌロ納ハ飯トナル

蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔公山蜂ヲ飼ル名ヅケ飼玉ヲ故カク号

窓中蜂　神瓊禅師蜂窓紙ニアタリテ出ントシテ出ルコトアタハサルヲ見テ世界カクノコトクヒロシトイヘトモ出ルヿアタハストテ

蜂の巣を用ひる法

妙薬　蜂にさされる薬

女竹の巣を取て一束にきり三本ヨリ三升入て二升に煎

乳の出る薬

蜂の巣を黄蜜にて磨て食後に用ゆ

妙術　蜂を

なるに地に付て丙丁火と三度と出口の中にて丙丁火と含ずして七遍

出て其土をとりぬるべし

蚤　人をさす虫　俳　七歳　松顧　死てこれあるべきもの家

狂　白ひらなる人ぞと問へハ虱有のあるところへとあれもせぬと蛾金

蝶　異名　月蝶・黄蝶・鳳車・野蛾・採花使・粉柏・蛺蝶

右呉名ハとしぐく品の秘もべくしひしの化したるものなれど名ハ其心の含ものにとれて

哥　古今　おのがさと　遍昭

ちりぬるハ後いあるさとうる花をおりひろ〳〵ものもまとゝ嫌うる

夫木　定家

ゆゆしきろなる花ハ白ふる新殖の拂の花のろてゝ

ちるれてもまぬく庵室ハたれて

ぬれ行妹をちゝぬ嫌うる　仲正

詞　こひうゝ。ちろうゝ。まとゝ。初嫌。花ゝ。花くにうう。加ちゝの金れて。てゝのいろく

。てゝのこころ。ねれうつし
。者をぬとむ。嗟をやべろ

連 ちろまのれよけれこの蝶ひ宗養

排 名月や町中に死ぬこ蝶うえ其角

排 ちりぬ〜表の蝶ひ人小蝶うえ曽良

排 蝶達に翌を蝶の死ひ山里

排 受け有の蝶ひ蝶ひ川　治川

狂 蝶くの他をいうとこ蝶なれる
人もかさぬ〜ひ蝶ひ蝶の死辺　貞柳

詩 胡蝶之詞　東坡

双眉捲鈌絲・両翅暈金碧・
二ツノ眉ニハ黒キ糸ヲマキヌルヤウナ　ホ
フタツノツバサハイロ〳〵ノ色ノ金クリアル
ルナリ

初来花爭妍・忽去鬼無跡
初テキタルトキハ花モソノ色ヨキヲアラソヒタレドモ去テハ夢ノアトモノコサズカホヨキコトハイダラトナルゾ

○香鬚粉翅暖爭飛・品物多情總属伊
香鬚粉翅暖爭飛品物多情總属伊

空ニトビカハス春ノケンキハ何モカモミナコノ蝶ニケシキヲウバワレタリ

上國万家風月夕・搜臺取次宿花枝
都ナトノ家タキトコロニトビキタツテ暮トナレハワカヲモフヽミヨロシキカタノハナノエダナドニヤトル

詩 蝶五字對句　同上

徘徊穿樹影・乱隨狂絮舞
繚繞戀花衢・軽伴落花飛

詩 蝶七字對句　詩楚

翅殘懶舞投幽檻・艶多慵飛过短墻
力困慵飛过短墻・謝公名蝶聲

魚部

嶺南異物志ニ人海南ニ浮テ蛟蝶ヲミル大サ蒲帆ノ如シ肉ヲカルニ八十斤ヲエタリ是ヲ敢ヘバキハメテ肥美ク

唐中金玉錢（コウチウキンギヨクセン）

唐穆宗（タウボクソウ）イトキ禁中（キンチウ）ニ花開キケレハアル夜蛺蝶（ケフテフ）数万飛来テ花間ニアツマル宮中羅巾（キウチウラキン）ヲ以テ撲トモ得ラレス帝紗（ミカド）ヲ中ニハリテ数百ヨヲヨタリ夜アケテコレヲ見レハ庫中（クラウチ）ノキンギヨクセンナリ

愛花人（ハナヲアイスルヒト）

長明発心集ニイハク昔遂ニ飽カスイハク我生レト云モノ花ヲ愛シテ六十カハルトモ花ヲ愛スルモノニナラントノ詩ヲツクリテ死タリ其後アル人ノユメニ蝶トナリテ侍ルト見タルヨシカタリケレバ其子花ヲ心ノヨロフホドウヱテ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソヘギテ孝養ノ心ニソナヘタリトソ孝心ノイタリカンスベキ事ニ

荘周夢（サウシウコノ）

蝶タルヤカナラズ分チカタクアラン云ク是ヲ物化ト云荘周夢ニ胡蝶トナルサメテ周ヘサレトモ蝶ノ周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙（異名）

石蜂（ヒヒ子）蟾蜍（形大ク色青ク蛙ヨリ大ナリ）蛙子（名科斗蛙ノ子ヘ）蝌蚪（ヒヒ子）

秋かけてゐる蛙子のもるさそむる時と季ふせり

家房

（哥）夫木

こ紀ろろあこくとむ心地して
堀江の蛙子とききるなり

家長

（哥）千五百番

春雨のふるの山田と来てみれハ
鳴のふゝ子蛙なくなり

信實

（哥）新六帖

春の門ハ花あこさむと名うけの
宏のうちにかれ蛙なくなり

兼盛

（哥）家集

沢あこ蛙の多い老よろ
おそくやうた人美れ小山田

詞 すだく。法多。川。池。沼。沢。田。
小田の蛙。あめそこ。苗代。夕月
夜。心次の夜の雲。れ去ちよ。
蛙も美のれらむ。ほろ。ろ花
なくまに。雨にさひき。こえ。
かえれこ。あとたにさく。あせつ
俳 れあと蛙ら西れ田 蓮二
重土も雨になれて蛙える 草也
狂 殿にくこ今まひてやよ蛙
よひみうこ畑まきれ貝柳
蛙 龍珠海ノ辺ニ
蟹 女子雑記 蛙ニアフテ問
テ云汝カ喜怒何如曰我喜ブ
時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時
ハコレヲサキニスルニ努眼ラモツ
テシコレニ次クニ眼眦ラモツ
テシ脹リスギルニイタリ
テノチヤムナリ

毛弥

日本紀 應神紀 十月国栖人国津物
ラ献ズ此クズ人常ニ山ノ菓ヲ
食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト
ス名ケテ毛弥ト云○本朝
食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ
熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ
ラシ醋ヲ和テコレヲ食フ唐三曼
群蛙ノ鳴ヲキヽテイハク此殊
人ノ耳ヲ駐スクス珪曰我鼓
吹ヲ听クニホトンドコヽニ及
バストイヒケレハ晏懼テ退ク
晏ハ鼓吹ヲコノムム人ニ○宋書ニ
蝦蟆ノ膾見ヘタリ○漢東方
朔カ傳ニモカハズヲ食フコト
見ヘタリ○淮南子ニ五月十五
日蝦蟆羮ヲ作ルトアリ○花
史左編ニ百越ノ人好デ蝦蟆
ヲクラフ 延會アレハコレヲ
寂シヤウ美味トスルナリ

井堤蛙 井デノカハヅ

蒔袋草子曰帯カ蒔信始テ能因二逢シ時能因今日見奈ノ引出物ニ見スベキ物アリトテ懐中ヨリ錦ノ小袋取出見ル子重宝長柄橋造ノ時ノ鉋屑ト云テケレバ節信大ヒニヨロコビ又懐中ヨリ紙ニツヽメルモノヲトリ出シテ見セケル能因トリテ見ルニカレタル蛙ナリトテ共ニ感歎シ又フトコロニシテ帰リケル云々

妙術 此蛙鳴 義の末死咳

さる枝のまふとも焼はてべし 鮑子取 東医宝鑑に青魚ノカ

鯊鰈 若狭就前うら生る此魚大さ五寸ばかり 蓬干て

法ありて生るゆへ

(俳)ひかるあつりて食へ必ずあつりて食へ

(任)かまとうしの先とうろうさの恒ハいくよいくれぬ味てそあれ 道鐘

田螺 田嬴一名 田青 胡麻とからし

(俳)ろうれ中に交るや田螺 蓮二

妙薬 日乾江 後後 田螺とハ

夷癖と法 田螺は の白と平と

ようろう松の又はたなとおとしてところく

松脂と田螺しのまるとと加うの物そねくあたゝめ付べし

蜷 (異名) 河貝子 蝸嬴 螺 蜷 (俗字) 御簾に付るる

總角の結ひたるかさらのごとく

奴に肥る 瓶後の俗ヒケモ云

(俳)なるハつの若ハ寄ハいこれ後三更

妙薬 産後後門 ハ痛を除

焼の末やれこそ和ハ粉

はして付べしあんるんの痛に治し

とゝて後堤の形はと二三度付
ものまきを付べし

寄居虫 形蟹に似て殼の売よ
一名寄生蟹こ云 朝鮮おしん
だのあよ一二人のものあり

(俳) 寄蟹の殼をさこと法さ貝堤亭
三方よ内長のさこる花寄居虫郎 乙由

(和) 小さこ流の上ら流世ること
宿をいうのかひいさ〻 信海

馬刀 蓑のちさこる貝こ馬刀
の形よあらぐ金てこさまてこと

(俳) そこにこる刀系三月流帆蛾 蓮二
流れて天でるる刀の見も蓑 千文

(狂) いゝとまそこ下さこまらねば
いくも蓑こ永ひまを結て 宇羅

乞張よ 三才図会 美鯛魚に似そろ

(俳) 張はまこてもろこを鯛の部 方策
見良の寄りゝこまる鯛に似そろ 白羽

必用

はるかい二月一ケ月必用
以ア長せの法名をとる

破軍向方

夜九ツ 戌の方	夜八ツ 未の方	夜七ツ 未の方	
酉六ツ 申の方	酉五ツ 酉の方	酉四ツ 戌の方	
夏九ツ 亥の方	夏八ツ 子の方	夏七ツ 丑の方	
暮六ツ 寅の方	夜五ツ 卯の方	夜四ツ 辰の方	

日刻 第一日寅の日寅の刻卯
の日卯の刻辰巳の刻

行作事 西南よ人
てもくべし

壬の日をのぞくべし 甲庚
丙壬のしくさをもらも

楽事 是日と名非の吹と
ひて民俗酒とたつ

さて肥辺城拾業す事を
拾ひ事れを踏こ落る拾八を
ざき一手ざらら拾発を発ほこ
ろびころ拾ハ二月末よい大坂

[illegible]

なり酔に乗じて暮を惜そ

あるはたのしむ　死をもわたに

わしまほしかれ日月人をも

ともに偏なき楽土平

中和のときなりうるる

天氣占候

是月和の日三あれハ豆よ

し　素問曰丑に風ならざれば

人寒熱多し　こゝろ平なに

雷あるに六月熟こゝろ雨ふるべ

雪なる月ひろうるれば災る矣お

又切来にて山田米價る

西に人まに蠶茶もに民災

あり此月長雨死る　早るる月

蝕つるべ茶安し　武に災あり

二月用

[illegible]

養猫法

[illegible]

花壇上

此月彼岸なるまじ

製筆

此月より三月十日までに収め

剃るべし　筆を佳とす毛ハ秋ハ

九月に取る法和毛白毛とに

よしとす軸竹もにく其ほかよろ

和も竹を煎て和るべし　ひ

毎く酒に硫黄を入まして筆の

毛さ紀を浮さべ　筆の拔しに

果多生

梨石榴本多の拔よ

ろうても其あ拔相変の手にも

のをとるにはけ拔の下へたハ

もしてよとべし　実ゐ生じ

雜品

○葡萄の根を撥幹を

あげおくべし　○墻垣に藥く

べし　○石菊の樹の下と春

至しこのようにさべて草

木の茂らざるにも社日の

の酒と根をそくべし　根去

ゑびも茅ぜること

和名抄の酒をかけてもはし

養生

二月天気晴時の日とくに三里絶骨灸ふせぐ　灸に気にいり御手

衛仙のやまひなしと養書にえらう但灸穴は其人の病症によりてあるべし

右の二穴にかぎらべうとす

服神明散　後神明茯苓　桔梗　附子　烏

佩べし　菖蒲　桔梗　細辛　各

頭　物　心　散し　紅花の袋に入れ

脊に帯べし　一家病人

疫あらばけらもうを食べ

服たての　うして服されば

あせ生てやまひ速に癒

にまさるる法　二月丁未の日書

花と桃花を陰干はして粉し

ばその日服うてのみて一日に三度用ゆべし

二月飲食　料理献立

禁忌

兎肉　水と中ずる　鶏卵　二月

ふをやぶる　黄花菜　二月ふくべ　痼疾を発す

陳俎　二月ふくべ　痼疾を発す

陰流水　二月春の雨　梨子　疾を発す

二月食べるものあるべし　酸物　生冷なるものと食べべし

大辛物　二月ふくべ　ひうしを除く

料理

汁　たいぎ　よりうる　由

ふぐも記　こりわた

やけぬ　あや

白うと　ようある

ほうきそ　ちうさ

ねいも　めぐど

韮　二月ふくべ　太邑あ　志陸と称る　千金方に出

鱠　こい・かいつぶり・むぐり・せいごが　さうり・糸作り・若たけ　うど・若たけ

白うと・ほくし　茱萸・ふとん　坪　椎茸　ゆうぜん　うど

指身　生姜・うり・きくらげ　西老翁　芽たて　いりこ　山でもの　まつたけ　こしらへす

二汁　椎かも　小串　宵付　つぶ椎茸　煮物　にもの

吸物　きのめ　白うと　ふくらけ　きくらげ　吸物　たこ　若たけ　生姜　ひしほ　拾　ちうげん　ふなこ

鱸　あげくり　きくらげ　坪　焼くり　きくらげ　うど　ふなこ

鱸　あげくり　きくらげ　坪　焼くり　きくらげ　うど　ふなこ

二汁　ひうと　藤ずく　かしら

精進　汁　こんぶ　椎茸　根いも　ゆうね

いの　千房　そうあへ

なめ茸　きくらげ

もいも　椎茸　ろうば

茗荷　ろうば

まてり貝　ろうる　ろうる　ろうる

和物　たこ　若たけ　生姜　ひしほ　拾　ちうげん　ふなこ

吸物　きのめ

煎鰹　白うと　ふくらけ　きくらげ

煮物　にもの　小串　宵付　つぶ椎茸　西老翁　芽たて　いりこ　山でもの　まつたけ　こしらへす

坪　椎茸　ゆうぜん　うど　ふなこ

鱠　こい・かいつぶり・むぐり・せいごが　さうり・糸作り・若たけ　うど・若たけ

時物

魚　かも　源氏鳥　雀　鳥　かも　源氏鳥　雀　鳥　かも　源氏鳥　雀

青物　落のたこう　茄子　茄子　茄子　うど　松茸　茄子　茄子　うど　松茸　茄子　茄子　うど　松茸　茄子　茄子

梅干久貯法　極上の梅酢一升に塩八合石の酢と蕪とをいれ壺の底流むなり梅の色白紅白八重　辛子に塩ひいきあるひは粉ざ寒ざるを枝ごと切て流る塩に

和物　かんぴょう　ふくろ　揚こんにゃく　きのこ　うど

煮物　椎茸　ばら　ろうの葉　吸物　ゆり　蕨

に掛所へ死の上まで上がる
多くは入る　掛間のくすり丸　撰に紙蓋
とて人の通ハざるふかき所に死て死
用ゆるかあれば　ろとまく死て死
多くなれば死　用て蓋の内に違
うそ物　絹のけんかとれもはし

蕈葉海松貯法

ろとを通し蓋の
ろ一升塩一合あらせ漬置
ろかるとしてくたろ

海藻貯法

をぞく一升水
と去塩三合合て
紙封して　揆ぜ
用る時ハ上へ　く水につけ塩を

本芽作法

毎月晦日に小藏
きの目を石蓋よ
まれおけば芽を生をこれを
ろにろうとす毎朝ろ
ち日はそとぐ　ちゃく
芽をいざとなり

春宵閑文五月令 清物荃 三月部 二